

蠟管資料群の 探索・保存・再生・分析

日本女子大学 文学部 教授

清水 康行



研究の背景

蠟管は、19世紀末頃から用いられた録音再生メディアで、蠟を主成分とする円筒の表面に刻まれた凹凸をトレースすることで再生音を得るものです(図1)。当時の会話や芸能が音声として記録されており、文献からは得られない様々な情報を得ることができ、言語史・文化史研究上から言っても、極めて貴重で価値の高い資料群です。

しかし、これまでは、それらの所蔵状況等の基礎的な調査も十分でなく、蠟管自体の劣化や装置の不備によって再生が困難でもあったため、これらの蠟管資料群を活用した研究は殆ど行なわれていませんでした。

そこで、私たちは、科研費の支援を得て、蠟管等の最初期録音資料群の所在状況調査、資料保存法開発、再生機器作製、録音内容分析に関し、音響工学・光学解析・保存科学・科学史学・博物館学・日本語学・言語学・日本史学・芸能史学の研究者が協力し合って、多角的な観点から総合的・横断的な研究に取り組むこととしました。

研究の成果

私たちは、国内外における蠟管等の録音資料所蔵調査の中で、欧州各地に当地を訪れた日本人の吹き込みが残されており、特に1900年のパリ録音が現存最古の日本語録音であることを知りました。この発見はテレビや新聞でも広く報道されました。

一方で、日本に残る蠟管の多くは劣化が甚だしく、また録音内容の特定も困難であることを確認せざるを得ませんでした。そうした劣化・破損した蠟管に対して、状態を更に悪化させない保存法の開発に取り組み、資料材質の分析、表面状態の記録も行ないました。

また、蠟管の状況に応じて触針式と非接触式を使い分



図1 最も一般的な規格の蠟管外観(撮影:コベルコ科研)

けた再生が可能な機器を作製(図2)、これを内外の資料所蔵機関に持ち込み、再生実験を行ないました。さらに、より優れた、かつ、資料にダメージを与えない再生法の開発にも取り組んでいます。

そして、再生された録音内容には、パリ万博を訪れた東京出身女性の活き活きた会話や、熊本・静岡・東京・茨城出身男性の聖書朗読、いろは唱え、芝居台詞等、百年前の日本語の諸相を伝えるものが含まれています。

今後の展望

こうした研究成果によって、私たちは、以前は殆ど研究・活用されてこなかった蠟管録音資料群に大きな光を与えることが出来たと自負しています。しかし、一方で、資料探索・保存・再生・分析の全ての面において、その研究は緒に就いたばかりとも言えます。最初期録音資料群を整理・保管し、学術研究資料としての利用・公開に資するための録音アーカイブズの設定も必要です。それらの基礎となる録音資料学ともいべき領域を確立することこそ、私たちに課せられた使命と申せましょう。

関連する科研費

平成14-17年度 特定領域研究「蠟管等の古記録媒体の音声表現に関する非接触的手法の開発と活用に関する研究」

平成18-20年度 基盤研究(A)「蠟管等の録音資料からの音声復元と内容情報の分析に関する横断的研究」

平成21-24年度 基盤研究(A)「蠟管を中心とした初期録音資料の音源保存・音声復元・内容分析に関する横断的研究」



図2 携帯式の蠟管再生装置(作製:トライテック)